

令和6年 辰年を迎えて

令和6年、新しい年が始まりましたが、早々から能登半島地震と羽田空港の航空機衝突事故という大惨事が続き、今年は、最初に被災された方々に謹んでお見舞いと、早期の復興をお祈り申し上げたいと存じます。

私の年度も今月から後半に入ります。上半期は、会員の皆様のお蔭で大過なくクラブを運営することができましたことに感謝申し上げますと共に、下半期も引き続きご協力を宜しくお願い申し上げます。

さて、1月は職業奉仕月間となっています。世界のロータリアンは現在約120万人ですが、この10年間で、多様性の進展から、ロータリーは変容し、職業奉仕が他の四大奉仕と同じ扱いになったように感じます。しかし、多くの日本のロータリアンと同じく私にとっても、職業奉仕はロータリーの真骨頂で、ロータリーを他の奉仕団体と峻別するものと考えます。職業奉仕の目的は、「ロータリーの目的」第2項に、「職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること」と定義されていますが、具体的には、行動規範や倫理訓、4つのテストに示されています。

先の航空機事故に関連して、2010年、日本航空が経営破綻した際、再生に着手した稲盛和夫氏の言動を思い出します。稲盛氏が再生に乗り出した時、「日航の幹部や社員が利益を上げることに無関心と罪悪感をもつ」ことや、更に、「利益より乗客の安全」を優先する考えに驚き、稲盛は、「利益を得ることの大切さと利益をしっかりと得て、社員が安定し、安全も守られる」と論じたとされています。稲盛の職業観は、京セラフィロソフィに於いても「公明正大に利益を追求する」と示され、即ち、「利益を上げることは恥ずべきことでもなければ、人の道に反したことでもない。自由市場に於いて、競争の結果で決まる価格で、堂々と商いをして得られる利益は正しい利益」と自身の経営哲学を述べています。

こうした稲盛の商人道の考えの源流は、欧米より早く経営倫理を説いた江戸中期の石田梅岩の石門心学まで遡れますが、この商人道は、プロテスタントの影響と利己利他の精神からなるロータリーの職業観と驚く程、重なります。

今回の航空機事故では、370人を超える人命を手際良い乗務員の活躍で救助されたと賞賛されていますが、その陰で、稲盛和夫が日航の幹部や社員の精神を変えたことが思い出されました。そして、これこそロータリアンが目指すべき職業奉仕だと考えます。